レジーナ・カルマ～if～

第２話 if：暗転の決断

　―バチン、バチンと館の照明が一斉に弾け飛び、世界は一瞬にして漆黒の闇へと突き落とされた。衣服が激しく擦れ合う音と、誰のものともわからない濡れた吐息が響き渡る。本編ではここで恐怖に身を竦ませ、大河にカラダを奪われるがままだった琴葉。しかし、その前に琴葉の胸の奥で、全く別の感情が爆発していた。

琴葉：（…嫌。理人くんと離れたくない。もしあの魔女の言う通り、誰かが誰かを狙っているなら…！）

　人見知りでいつも他人の後ろに隠れていた少女は、闇の恐怖を、理人を失う恐怖で塗りつぶした。手探りで、しかし確かな記憶を頼りに、暖炉のすぐ傍に立っていたはずの、大好きな青年の気配へと飛び込む。ガサリ、と重いスラックスの布地が擦れる音がした。琴葉の華奢な手のひらが、迷いなく理人の引き締まったおしりをガチリと捉える。

理人：「っ！？誰…あ、あふぅッ！？」

　闇の奥で、理知的な青年からは想像もつかない、脳髄を直接灼かれたような艶めかしい絶頂の喘ぎ声が弾けた。衣服越しに容赦なく、深く注がれた琴葉の執念の愛撫に、理人の全身の血が沸騰する。その瞬間、呪いのルールが発動した。理人のカラダから本来の魂が押し出され、代わりに琴葉の魂が滑り込む。急激に視界が高くなり、己のモノとなった男らしく大きな指先を感じて、理人（中身琴葉）は闇の中で小さくガッツポーズを決めた。

理人（中身琴葉）：（やった…！理人くんのカラダに入れた…！）

　一方、空中に弾き出された「理人の魂」は、「大河の魂」に気付いた。今この瞬間、広間には「中身が空になった琴葉のカラダ」が残されている。理人（中身琴葉）は、大きな声を精一杯張り上げて叫んだ。

理人（中身琴葉）：「僕の、琴葉のカラダが空いてる！早くそこに入って！」

　理人は、自分のカラダから発せられる言葉から状況を瞬時に理解した。

理人：（そのことを知っているってことは、僕のカラダを奪ったのは…琴葉さん？そして大河の魂がここにいるってことは大河のカラダは、誰かに奪われている。陽花里か…いや…陽花里は、大河のカラダを奪うなんてことをしないだろう…おそらく、大河は、魔女に乗っ取られた。僕は男の大河のカラダには入れない。なら、僕が今入るべきなのは―中身が空の琴葉のカラダだ！）

　理人は、「中身が空になった可憐な少女の琴葉のカラダ」へと迷わず飛び込んだ。不意に館の奥で自家発電機が作動し、禍々しい橙色の光が広間を照らし出した。

第３話 if：立場逆転の熱視線

――バチ、バチバチバチッ！

明かりが戻った広間で、最初に声を上げたのは大河だった。

大河（中身魔女）：「ふぅ……あ、驚いた。本当に停電だったな……」

いつもの快活な仕草で肩をすくめる大河。しかし、彼と陽花里は、まだ気づいていなかった。暖炉の前で対峙する「理人」と「琴葉」の中身が、完全に、そして自発的に入れ替わっていることに。男物のスラックスをぎこちなく触りながら、不敵に…いや、愛おしそうに微笑んでいる理人（中身琴葉）。一方、自らのスカートの後ろを両手で押さえ、顔を林檎のように真っ赤に染めているのは琴葉（中身理人）だった。

理人（中身琴葉）：「琴葉さん、大丈夫かい？…あ、いや、大丈夫？」

琴葉（中身理人）：「う、うん…大丈夫だけど…理人くん…どういうことなのかな？」

女の子特有の、可憐な声が自分の口から漏れ出し、琴葉（中身理人）は目眩を覚えた。視界がいつもよりずっと低い。見上げれば、自分が今まで使っていた「理人のカラダ」が、優しく、そしてどこか妖艶な熱視線を自分に投げかけているのだ。理人（中身琴葉）は、大きな手のひらを見つめ、内側から伝わる理人の温かさに胸を躍らせていた。

琴葉：（理人くんのカラダ、すっごく大きくて、あったかい…これなら、いつも他人の後ろに隠れてたわたしでも、理人くんを、わたしが護れる…！）

陽花里：「ねえ、二人ともなんか雰囲気違くない？っていうか、理人、なんか琴葉のことジロジロ見すぎじゃん？」

陽花里の鋭いツッコミに、琴葉（中身理人）は、ビクッと華奢な肩を跳ね上げた。女の子のカラダは思った以上に繊細で、緊張だけで心臓が破裂しそうにバクバクと脈打つ。

理人（中身琴葉）：「何でもないよ、陽花里。さっきの暗闇で、琴葉が寒そうにしていたから、僕が護ってあげなきゃと思っただけさ。」

流れるような王子様のような作法。理人の低く逞しい声でそんなセリフを吐かれ、琴葉（中身理人）は、自分の元々のカラダであるはずの「琴葉の顔」が瞬時に真っ赤に染まっていくのを感じた。

理人：（この状況から察するに僕のカラダに乗り移っているのは、琴葉さんに違いない。でも…だ、ダメだ…自分の声なのに、そんな風に言われると…女の子の…琴葉さんのこのカラダ、心拍数が上がりすぎて意識が飛びそうになる…）

第４話 if：魔女の誤算

大河：「このまま４人で睨み合ってもラチが明かないな。自家発電機がいつ完全に落ちちまうかも分かんない。誰か２人で廊下の奥にある書斎のブレーカーを確認しに行こうぜ…陽花里、俺と一緒に来るか？」

理人（中身琴葉）：「大河、陽花里。廊下の奥は危ない。僕と琴葉さんで見てくるよ。男の僕が先頭に立てば安全だし、琴葉さんを広間に残す方が心配だからね。大河は、陽花里を護って広間にいてくれ。」

　大河（中身魔女）は、一瞬眉をひそめる。サークルのブレーンである理人の「正論」を拒絶すれば、大河らしくないとして正体がバレるリスクがある。

大河（中身魔女）：「…チッ、あ、いや、おう！　理人がそう言うなら任せるわ！」

　こうして、理人（中身琴葉）と琴葉（中身理人）の二人が書斎へと向かうことになった。古い壁のブラケットライトの下、琴葉（中身理人）の手を理人（中身琴葉）がギュッと力強く握りしめる。

琴葉（中身理人）：「落ち着いて聞いて欲しい。僕は…理人だ。大河の中身は、魔女だ。あいつは、僕たちのカラダを奪おうとしている。」

理人（中身琴葉）：「その感じ…理人くん！でも正体がばれたら消滅しちゃうんじゃ…」

　大人しい琴葉（中身理人）が理人（中身琴葉）の手を取り、堂々と振舞っている。

琴葉（中身理人）：「大丈夫だ！自分から話せばバレた、ことにならない…君も勇気を出して正体を教えて欲しい。」

理人（中身琴葉）：「わたし、琴葉です…ごめんなさい、わたし、理人くんと離れたくなくて、暗闇で理人くんのおしりを触っちゃったの……！」

　理人（中身琴葉）は、泣き出しそうな顔で自白すると、琴葉（中身理人）は、元の自分のカラダを抱き寄せて包み込んだ。

琴葉（中身理人）：「謝る必要なんてない。むしろ最高だ。君の導きで僕はこのカラダにの乗り移ることができたからね。そしてそのことが魔女の次の選択を狭めるんだ。」

　琴葉（中身理人）は、華奢な琴葉の柔らかくて熱い輪郭を内側から感じながら不敵に微笑んだ。

理人（中身琴葉）：「魔女の呪いは【異性のおしりを触って感じさせる】。今、広間にいる魔女は、「大河くんのカラダ」に入っている。つまり、魔女が次にカラダを乗っ取れるのは「女のカラダで、陽花里さんか理人くんがいるわたしのカラダ」だけってことね。」

第５話 if：愛撫の絆

琴葉（中身理人）：「その通りだ。琴葉さん。僕は、大河（中身魔女）の前で正体を看破する。それで魔女の魂が消滅するはずだ！もし、魔女が隙を見て僕を襲い感じさせ、僕のカラダを奪ったとする。その場合は、僕は、君以外の誰かに乗り移って魔女の正体を暴けば、どのカラダにいても結果は同じだ。」

理人（中身琴葉）：「…さすが理人君…！わたしは、どんなカラダになってもあなたを信じてるから…できれば…その…ずっとわたしのカラダでいて欲しいけど…」

理人（中身琴葉）が恥ずかしそうに上目遣いで琴葉（中身理人）を見つめる。

琴葉（中身理人）：「僕でいいのかい？琴葉さん…実は僕も君に惹かれ始めている…君の行動力、聡明さ、そして何だか君のカラダにいると、君が愛おしくてたまらないんだ…」

理人（中身琴葉）：「理人くん…嬉しい💕わたしもずっと理人くんのカラダにいたいの…だから…あなたに、わたしのカラダの魅力、たくさん感じて欲しいな…💕」

理人（中身琴葉）の手は、琴葉のスカートの上から、その無防備で柔らかいおしりを容赦なく、深く、鷲掴みにした。

琴葉（中身理人）：「な…に、これ…ひゃうんッあぁッ…！！」

強烈な愛撫に、琴葉（中身理人）の全身の血が沸騰した。琴葉のカラダは、恐ろしいほど過敏だった。衣服を限界まで無視して食い込む指先の質量と、脳髄を直接灼くような甘美な快感が、背骨を駆け抜けていく。本来なら「魂を奪うための呪いの愛撫」のはずだった。しかし、二人はすでに【異性同士の入れ替わり】を完了している。

おしりを触られた琴葉（中身理人）のカラダから魂が押し出されようとするが、弾き出された理人の魂は、目の前で自分を愛撫している「理人のカラダ（中身琴葉）」へと強制的に引き寄せられる。だが、そこにはすでに琴葉の魂がいるため、ルール③「１つのカラダに魂は１つだけ」が働き、魂の移動は発生しない。代わりに、カラダに刻み込まれた極上のエクスタシーだけが、ダイレクトに理人の精神を侵食していった。

琴葉（中身理人）：「あっ、あふぅ、んんッ💕すご、い…琴葉さんのカラダ、優しくて、柔らかくて…触られてるだけなのに、頭が、おかしくなりそう…っ💕」

理人（中身琴葉）：「ふふ、もっと正直になっていいんだよ？小難しい計算なんかより、カラダの方がずっと正直なんだから。ほら、ここが気持ちいいんでしょう？」

琴葉（中身理人）：「ああ…これから魔女と対決しなければならないのに…こんな…」

理人（中身琴葉）：「だからだよ💕理人くん。魔女と対するためにはこれがいいの💕」

第６話 if：魂のロック！

　指の節の硬さ、手のひらの質量。かつて自分が持ち、今は想い人が使っている「男の手」に、自分の「元のカラダ」を徹底的に開発されていく異常な興奮。理人の理性は、琴葉のカラダがもたらす圧倒的な快感の濁流の前に蕩けるように焼き溶かされていった。

琴葉（中身理人）：「あああッ…！好き、好きだよ💕琴葉さん…！僕、このカラダで、君にずっと触られていたい…っ！！」

　薄暗い密室の中、可憐な少女のカラダで激しく弓なりに反り、絶頂を迎えた理人。その瞳には、魔女への恐怖など消え去り、目の前の「自分自身（中身琴葉）」への狂おしいほどの愛着と依存だけが宿っていた。

理人（中身琴葉）：「わたしもよ…さあ、もう怖くないでしょ？行こ。理人くん！」

　広間へと戻ってきた二人。大河（中身魔女）は、陽花里をターゲットにしようと背後に回り込もうとするが、理人（中身琴葉）がその大きな身体で陽花里を遮り、琴葉（中身理人）が魔女の前に毅然と立ちはだかった。

大河（中身魔女）：「おい、どうしたんだよ、二人とも。そんなに警戒すんなって。」

琴葉（中身理人）：「君の正体は僕と…いや僕と琴葉がとっくに見抜いているよ。でもすぐには逝かせない…」

大河（中身魔女）：「なっ…！？」

　魔女が息を呑む。陽花里は、訳がわからずぽかんとしている。

陽花里：「え？…どういうこと？」

　理人（中身琴葉）と琴葉（中身理人）が叫んだ。

理人（中身琴葉）：「ルール⑤、わたしは、『理人のカラダ』に永久に定住する！」

琴葉（中身理人）：「僕も、『琴葉のカラダ』に永久に定住する！」

　二人がお互いの肉体に「定住」を宣言したことで、魂の消滅ペナルティは完全に無効化され、かつ二人の器は完全にロックされた。魔女はもう、陽花里以外の器を奪うことができなくなったのだ。

大河（中身魔女）：「やってくれるじゃないの。でも…すぐに逝かせないだって…その甘さが命取りになるのよ！見てなさい！そこの女のカラダを奪って…立て直してやる！！」

　狂気に駆られた大河（中身魔女）が陽花里に襲いかかる。その瞬間、理人（中身琴葉）のカラダが、電光石火の速さで大河（中身魔女）の背後へと滑り込んだ。長い指先、引き締まった節の硬さ―本来は理人のものであるその大きな手のひらが、大河（魔女）のジーンズの上から、その肉厚なおしりを容赦なく、深く、抉るように鷲掴みにした！

第７話 if：完全なる昇華

大河（中身：魔女）：「ひゃあッ！？何をする…熱い、カラダが…あッ、あぁぁん💕」

以前の琴葉は、初心な少女だった。しかし、先ほど理人の愛を知り、彼を満足させようとした末に超絶揉みテクを習得していた。そのテクニックが惜しみもなく、大河のおしりで再現される。

理人（中身琴葉）：「魔女、あなたには感謝してるわ💕あなたのおかげでわたしは、理人と結ばれることができた💕」

大河のカラダは、本来、男からの愛撫を想定していなかった。しかし、琴葉の凄まじい執念と理人への愛が、衣服を無視して脳髄を直接灼くような強烈なエクスタシーとなって魔女を襲ったのだ。

琴葉（中身理人）：「そうだな…だからこれは僕たちからのご褒美だ。逝く前にそのカラダでたっぷりと快感を味わうといい…」

大河（中身魔女）：「そんな、今のあたしは、オトコなのに…オトコに触られてこんな…ひゃうんっ、だめぇッ、魂が、溶けるぅぅぅ！！💕」

おしりを通じて極限まで高まった快感が暴走する。定住した二人はもちろん、大河（中身魔女）は、目の前の陽花里のおしりにさえ手を伸ばすことができなかった。そして絶頂と同時に大河のカラダを離れ、行き場を失ったまま現世に留まるためのエネルギーを完全に使い果たした。そして満たされた悲鳴を上げながら完全に消滅していった…

魔女が消滅した瞬間、大河のカラダに、空中を彷徨っていた「大河の魂」がスポンと吸い込まれるように戻ってきた。

大河：「…うっ…うおっ！俺、今まで何してたんだ？めちゃくちゃケツが熱くてジンジンするんだけど…」

陽花里：「魔女に乗り移られて可愛く喘いでいたのよ。覚えてないの？大河があんなに可愛くなるなんてね…今夜はわたしが可愛がってあげようか💕」

陽花里が大河のおしりを揉みしだく…

大河：「ひゃあッ！？何をする…熱い、カラダが…あッ、あぁぁん💕」

陽花里：「あら💕魔女と同じ反応…？追い出してあげないとね💕」

陽花里の手つきが更に激しくなり、大河のおしりを激しく揉みしだく…

大河：「や…やめ…陽花里…あ…ああ…💕」

そう言いながらも大河は、可愛らしくその大きなおしりを陽花里に突き出していた…

最終話 if：４人の未来

　大河が陽花里のようにいちゃいちゃとするのは新鮮だったが、それはそれで幸せそうだった。一方、入れ替わったままの理人（中身琴葉）と琴葉（中身理人）は、暖炉の前で静かに微笑み合っていた。

　嵐が去り、洋館を出る道すがら、理人のカラダとなった琴葉は、華奢な自分の元のカラダ（中身：理人）の手をギュッと握りしめる。
理人（中身琴葉）：「理人くん…わたし、このカラダで、一生あなたを護るね💕」
琴葉（中身理人）：「ふふ、頼りにしてるよ、琴葉…」

　大河と陽花里にいた２人を振り返り声を掛ける。
大河：「おい理人、琴葉！さっさと帰るぞ！」
陽花里：「もー、マジで怖かったんだけどー！でも、あんたたち二人、なんか嵐の間にめちゃくちゃ仲良くなってない？っていうか、距離感バグってじゃん？」
　陽花里の言う通り、二人の距離感は完全に狂っていた。

　頼れる好青年となった理人（中身琴葉）は、華奢な琴葉（中身理人）の肩を大きな腕で引き寄せ、そのふくよかなおしりを、人目を盗んでジーンズの上から優しく愛おしそうに揉みしだいている。
琴葉（中身理人）：「ん…っ💕だ、ダメだよ琴葉、大河たちの前だよ…あ、あん💕」
理人（中身琴葉）：「ふふ、いいじゃない。わたしの、いえ、もうあなたのカラダだったわね、触られるのがこんなに大好きなんだから。これからも、毎日たくさん可愛がってあげるね、理人💕」

琴葉（中身理人）：「ここでは恥ずかしいから、夜になったら、今度は琴葉の…いや、僕のこの可憐なカラダを、君のその大きな手で、たくさん可愛がってね？」
理人（中身：琴葉）：「もうっ💕わたしのカラダでそんな可愛いこと言っちゃうなんて…うん。頭が狂っちゃうくらい、たくさん感じさせてあげる。」

　女性の可憐なカラダで、男の手のひらがもたらす愛撫にトロンと目を潤ませ、幸せそうに喘ぐ理人。理屈ではない純粋な快感と、愛される安心感に蕩ける幸せを知った。一方の琴葉も男のカラダを手に入れ、大好きな人を自分の腕の中に閉じ込め、極上の快感で満たすことにこの上ない悦びを感じていた。お互いがお互いのカラダを内側から愛し、外側から開発し合うという、完璧に完成された「新しい男と女」の美しい関係性が、確かにそこに存在していた。館を出る二人の足取りは軽く、不思議なほどに、誰よりも深く、淫らで、そして最高に幸せな相思相愛の未来へと歩み出していくのだった。